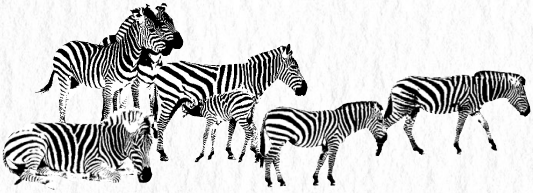
ポジティブ・ディビアンス
「知」のシリーズ



目　次

豊かな水稲地域で低栄養の問題に挑む
ベトナムで育まれたポジティブ・ディビアンス

ラモンは６年生を終えられるか？
地方部アルゼンチンの児童の学習継続のためのポジティブ・ディビアンス

人間関係のあり方を変えることで救われる命
米国病院でのMRSA感染コントロールと予防のためのポジティブ・ディビアンスの活用

ひまわりは太陽に向かう
ウガンダにおける児童保護のためのPD

豊かな水稲地域で低栄養の問題に挑む

ベトナムで育まれた
ポジティブ・ディビアンス

著：アービンド・シンハル,
ジェリー・スターニン,
ルシア・デュラ
翻訳：河村洋子

ポジティブ　ディビアンスはコミュニティ自らの手にある知恵を発見し、それを活かすことを可能にする。

「スターニンさん，あなたに与えられた時間は６ヶ月です。その間に結果を出してください。」とベトナム外務省の高官であるヌウ氏は告げた。
「何？６ヶ月だと？６ヶ月間で結果を出せと言うのか？」ジェリースターニンは自分の耳を疑った。「そうですよ、スターニンさん。６ヶ月で結果を出すか、さもなくば私はあなたのヴィザの延長を承認することはできない。」

1990年12月、ジェリー・スターニンは、米国に拠点を置くNGOセーブ・ザ・チルドレンのオフィスを開設するために、彼の妻であるモニークと10歳の息子であるサムと一緒にハノイに到着した。彼のミッションは5歳以下の子どもの3分の2が低栄養に苦しむ国で、大規模な子どもの低栄養改善プログラムを実施することだった。

ベトナム政府はこれまでの経験から、栄養補助食を提供する従来のプログラムの結果が、持続性に欠けることを学んでいた。プログラムが終了したとき、大抵その成果も次第に先細って行った。スターニン夫妻は外部からの大きな援助を受けることなく、コミュニティ自らが栄養状態をコントロールすることができるようになるアプローチを見つけ出さなければならなかった。
そして、それを早急にしなければいけない！
何しろ、ヌウ氏がスターニン夫妻に与えた猶予はたった6ヶ月だったのだから！

「危機」それとも「機会」

北京語を数年間学ぶことで、ジェリーは漢字の「危機」は二つの意味を表すことを知っていた。それは「危機」と「機会」である。恐らくこのベトナムで、何か新しいことを試みるべきだということだ。必要は発明の母である。これまで通りの低栄養対策では，迅速なそして持続可能な結果を生まない。そこで、スターニン夫妻は数年前にタフツ大学の栄養学教授であるマリアン・ゼートリンが提案したポジティブ・ディビアンス（PD）の概念を使えないだろうかと考えた。
ゼートリンは、いくつかの貧しい家庭の子どもたちが、特別に恵まれた環境にあるわけではないのに、他の家庭の子どもたちよりも栄養状態が良かった理由を解明しようとする中

機 = 危 + 机

で、PDという考え方に気づき始めた。これらの子どもたちの親は、どんなことをしているのか？恐らく低栄養改善のためには、アセット・ベースド（資源に基づく）アプローチが必要だと思われた。それは、何が間違っているのかに焦点を当て、部外者がそれを正すような従来型のディフィジット・ベースド（問題に基づく）アプローチとは対照的なものである。つまり、コミュニティの中でうまくいっていることは何なのかを見つけ出し、それを広めるのである。

photo: PDI

介入対象の集落で子どもたちを測定する女性たち 写真：ポジティブ・ディビアンス・イニシャチブ（PDI）

PDは理論的には聞こえが良い。しかしこれまで、実際の栄養介入のデザインに概念を適用した者は誰一人としていない。コミュニティの中でうまくいくだろうか？どのようにすればよいのか？スターニン夫妻は道筋も、青写真すら持ち合わせていなかった。どこから始めればよいのか？

ベースとなるハノイの近くから始めるのが良いだろう。ハノイ南方に位置するタンホア州のクアンスオン郡の子どもの栄養失調の割合は高かった。うるさいトラクターエンジンを積んだロシア産の自動車でハイウェイ一号線を4時間走った後、スターニン夫妻は現地に到着した。ベトナム戦時下のベトコンゲリラにとっての軍事品の主要な運搬路であったホーチミン道は、クアンスオンを蛇行しながら走る。そしてそこではアメリカ人に対する疑念は目にみえて強い。スターニン夫妻が最初にすべきことは、あらゆるステークホルダー（重要な関係者）との信頼関係を築くことだった。後は、自然とついてくるはずだ。

数日に及ぶ地元政府職員との打ち合わせの後、栄養状態の基礎調査のために4集落を選んだ。6台の体重計と自転車を装備した保健ボランティアたちは、3日半の間に4集落で2,000人の3歳以下の子どもの体重を測定した。それ

ぞれの子どもたちの年齢と体重が記録された育成カードが集められた。測定された子どものうち約64％が低栄養状態にあることが分かった。
データが集計されるとすぐに、スターニン夫妻はおそるおそる「栄養状態がとても良い、非常に貧しい家庭の子どもはいますか？」と尋ねた。
「はい、はい、数名いますよ。非常に貧しい家庭に育つ元気な子どもが！」という答えが返ってきた。

タンホアのそのような貧しい家庭は、特別な資源を持たずに何とかして子どもの栄養失調を回避しているポジティブな逸脱者に他ならない。「ポジティブ」なのは、彼らが何かをうまくやっているからで、「逸脱者」であるのは他の多くの人たちがしていない行動をしているからである。
他の人たちがしていないが、これらのポジティブに逸脱しているPD家庭がとっている行動とは何なのか？この問に対する答えを見つけるために、4集落それぞれのコミュニティのメンバーたちは、貧しいにもかかわらず、栄養状態が良い子どものいる6家庭を訪問することにした。スターニン夫妻は、コミュニティ自らが発見した解決策は活用される可能性が高いはずだと信じていた。
見て取れる興奮が集会所に満ちていた。自己発見の過程で、以下の栄養状態の良い子どものいる貧しい家庭が実践していた重要なPD行動が明らかになった：

①ポジティブに逸脱していた家庭では、家族の誰かがスイートポテトの葉を子どもの食事の中に加えていた。これらの葉は素晴らしいビタミンであるベータカロチンと鉄やカルシウムなどの重要な栄養素を豊富に含む。

ベトナムの水田でエビと蟹を集めている様子　　写真：国際稲研究所によるものを加工

ポジティブ・ディビアンスはもしコミュニティが解決策を自己発見するなら、それは活用される可能性が高いという前提に基づく。

「千回聞くことは、一回見てみることにかなわないし、千回見ることは一回実際にしてみることにかなわない。」PDIは“実践”を強調する。

②ポジティブに逸脱している家庭では、家族の誰かが水田から小さなエビや蟹を集め、子どもの食事の中に加えていた。これらの食材はタンパク質とミネラルを多く含む。

家族や村民は栄養に関する科学的な知識をもっていたわけでないが、それは重要ではなかった。興味深いのは、これらの食材が他の誰もが入手できるのに、多くのコミュニティのメンバーが幼い子どもたちには適さないものだと信じていたことである。さらに、子どもたちに一般的ではない食べ物を与えていた他に、PD 家庭では子どもの面倒を見る人（ケアギバー）は、

①一般的には２回である子どもの食事を３、４回に分けていた；

②食べ物を無駄にしないように、子どもに積極的に食べさせていた；そして

③食事の前後に子どもの手を洗っていた。

言うのではなく、実行する

「真相」が明らかになったら、他の人たちにそのことをすべきこととして言いたいのは自然な衝動である。様々な「言う」ための方法を皆で考えた。例えば、家庭訪問、見栄えのするポスター、学習会などである。しかし、スターニン夫妻は他国での過去の現場経験から、長く続く習慣を変えるのは難しく、一方新しいものは優れているのが明らかな場合であっても、根付くのが難しいことを知っていた。彼らはそのような「ベスト・プラクティス（好事例）」的な解決策が、常に人々からの抵抗を受けることを知っていた。スターニン夫妻はこのような状況を、他者に何かをするように言われることに対する「人間が持って生まれた免疫体系の抵抗」というフレーズを造り、表現した。

ブレインストーミングが暗礁に乗り上げたとき、懐疑的な年老いた村民が静かに発言した。「千回聞くことは、実際に一度見てみることほどの価値はないし、千回の見ることは、実際に一度してみることほどの価値はない。」

ハノイへの帰途、スターニン夫妻はその老人の言葉の中にある知恵について話し合った。

介入集落での料理教室の様子。
写真：ポジティブ・ディビアンス・イニシャチブ（PDI）

子どもの体重は成長の様子が目に見て分かるように，グラフ上に点で示された。
写真:ポジテイブ・ディビアンス・イニシアチブ(PDI)

彼らは「見ること」や「聞くこと」よりも「すること」を強調する栄養プログラムをデザインするのを手伝ってくれるだろうか？
4箇所の介入集落それぞれで、2週間の栄養プログラムがデザインされた。低栄養状態にある子どもの母親やその他の家族のケアギバーに、エビや蟹、スイートポテトの葉の部分を集めるようにお願いした。とにかく実践することを重視した。小さな網と入れ物を手にして、母親たちは水田に入り、小さなエビや蟹を集めて歩いた。

ケアギバーたちは、集めた食材を使った新しいレシピの調理法を学んだ。ここでも「実践」を強調した。
座って子どもたちに食事させる前に、子どもの体重を計り、成長の様子を示すグラフに点で印を付けていった。子どもたちの手をしっかりと洗い、食べ物が無駄にならないように子どもに食べさせた。複数のケアギバーたちが、他の子どもたちと一緒の場合、自分の子どもが普段よりたくさん食べることに気づいた。
家庭で一日2回の子どもの食事の習慣を、少量で3、4回に分けるよう母親に薦めた。このような食事の方法と観察を2週間続けた。ケアギバーは、子どもが明らかに健康的になっていくのを目にした。
体重計の針は上がり続けた！
2年間続いたパイロットプロジェクトの後、PD アプローチが使われたコミュニティでの

ポジティブ・ディビアンスアプローチはデータから情報を得て、データの中から見つけ出する。データはあらゆる段階で集められ、進捗を観察するためにコミュニティに開示される。データはどこに問題と解決策があるのかを教えてくれる。

PDアプローチでは，内部の人たちが仲間に実際の証拠を示しながら、媒介役となって変化を導いていく。

モニーク・スターニンが栄養に関する会話を聴いている様子。　写真：ポジティブ・ディビアンス・イニシャチブ（PDI）

低栄養の割合は、驚くべきことに85％減少した。

その翌数年間で、PD 介入はベトナム全土の国家プログラムへと拡大した。220万人に恩恵をもたらし、5万人の子どもたちの栄養状態が改善した。

ベトナムにおけるこの先進的な PD 運用化の経験は、必要性から生まれ、奮闘と学びと共にいくつかの重要な洞察を提供する。

まず、PD アプローチは「伝達」介入的な KAP（Knowledge= 知識、Attitude= 態度、Practice= 行動）という健康教育で主流な枠組みを覆す。つまり、知識が増えることで態度が変わり、態度が変われば行動にも影響を与えるという考え方に依らず、PD は行動を変えることを信条とするのである。明確な行動

ステップから変化が少しずつ現れると、人々は変わるのだ、と PD は信じている。
次に、PD アプローチは、問題を解決する知恵は内部にあると信じ、従来の部外者である専門家の役割に疑問を投げかける。社会の変化を起こすことを生業とする専門家は大抵、コミュニティの問題を見つけ、それらを改めるために外部者の視点で解決策を提案し実装する。しかし、PD アプローチでは、専門家の役割は異なる。むしろコミュニティのメンバーが専門家である。専門家はファシリテーターとして、コミュニティがポジティブな逸脱者を見つけ出し、彼らのしている「一般的ではないが効果的な行動」を特定し、そしてすべての人がそれらの行動を実践できるようにする介入をデザインするのを手伝うのである。
三番目に、PD アプローチでは、内部の人たちが現実社会の中で証明していくことで、媒介者となり、変化を導いていく。PD 行動は既に実践されているので、解決策の実装に時間がかかったり、外からの資源を必要としない。さらに、解決策は地元にあるので、継続的に利益は享受される。
ベトナムにスターニン一家が到着して6ヶ月後、ベトナム外務省のヌウ氏は、スターニン一家に更新したヴィザを晴れやかな顔で手渡した。彼らは6年間ベトナムに住むことになった。
PD アプローチは、ベトナムをその根を育てる肥沃な土地として見つけ出した。だからこそ、今、その苗木が他の土地に栄養を求めて旅をすることができる。
プロジェクト終了後数年経過して生まれたきょうだいたちの多くが、低栄養状態に苦しまなかったことを研究結果は示している。これは、行動の変化が家族、ケアギバーたちに定着していることを、明確に示している。

この先進的なベトナムの物語は、モニーク・スターニンと故ジェリー・スターニンとの多くの会話と収録インタビューに基づくものである。さらに詳しく知りたい方は以下を読まれることをお薦めする：(1) Pascale, R.T., and Sternin, J. (2005). Your company’s secret change agents. Harvard Business Review. May, 1-11; (2) Sternin J. and Choo R. (2000). The power of Positive Deviance. Harvard Business Review, January-February: 14-15; and (3) Zeitlin, M., Ghassemi, H., and Mansour, M. (1990). Positive deviance in child nutrition. New York: UN University Press.

ラモンは６年生を終えられるか？

アルゼンチン地方部の児童の学習継続のための ポジティブ・ディビアンスの活用

著：ルシア・デュラ，アービンド・シンハル
翻訳：石川一喜

「私はラモン。サンペデロ小学校の１年生です。教室の掲示板にはクラスメイト24人分の誕生日が書かれています。私の誕生日は９月11日で、その日が来ることを楽しみにしています」

ラモンのいる１年生のクラス24人はそれぞれ自分の誕生日が来ることを待ち望んでいるが、それがどれだけやるせないことなのか彼らは気づいていない。３年生へと進級する今後２年間に、おそらく5人は通学を断念することだろう。６年生になるまでには、さらに残された約20人のうち７人が学校に来なくなるだろう[1]。2000年、サンペデロ小学校（ここだけでなく、アルゼンチンの地方部のミシオネス州全体に対して言えること）では、３年生に進級できるのは４人のうち３人で、６年を修了するのは２人に１人である。

ラモンのクラスの誕生祝いの掲示　写真：PDI

ミシオネス州のこの中退率の高さは何を意味するのか？なぜ、そんなに多くの“ラモン”が基本的な読み書き算を学ぶ機会を逸し、中途退学していくのか？その答えのひとつはミシオネス州の幼い子どもたちがこの地域に特徴的な自給自足的な農業の中で伝統的な役割を担っていることがある。例えば、次のようなことでラモンは退学をすることになるかもしれない。

子ども達は零細農業の営みにおいて重要な役割を果たす
写真：Flicker.comよりHamner_Fotos

- アルゼンチン北東部では主要作物であるキャッサバ栽培で親を手伝うため。
- タバコの収穫を手伝うため。タバコの葉は上部を傷つけないように下からむしるため低くしゃがまなければならず、ラモンのような子どもたちはその作業に適している。
- 草取りをさせられるため。子どもたちにとってそれは比較的楽にできる単純な作業である。

ポジティブディビアンスは、他のアプローチでは立ち行かなくなったきわめて困難な状況下で独自性を発揮し、解決策を導くのである。

ポジティブ・ディビアンスは見えていないものを顕在化させる。

腕組みをして抵抗するまなざしを送る教師たち　写真：PDI

つまり、ミシオネス州の幼い子どもたちは家族の生計を立てるために重要な役割を果たしているのである。彼らにとって、あるいは親にとっても学校に行くことは相対的に優先順位が低い。生活していくことは教育に優先するのである。しかし、ミシオネス州のすべての小学校が高い中退率となっているわけではない。いくつかの学校では低い。
ガルシア先生の学校をみてみよう。ガルシア氏は、ミシオネス州の中で児童の中退率が低い学校に勤務する教師である。彼は、クラスの子どもたちの家庭をしばしば訪問し、ローカルな飲み物であるマテ茶を飲みながら親たちに、妊娠していそうな家畜の豚の状態や、タバコの収穫に関して「それらはキロあたりいくらで売れますか？」と聞いたりして彼らと他愛のないような会話をする。ガルシア先生は、シルビアの両親を、マニュエル、リディアとファーストネームで呼び、子どもを学校に通い続けさせるよう彼らを勇気づけている。彼は「教育こそ偉大なイコライザー（人々を平等にする装置）だ」と強調する。「シルビアはいい児童で、明るい未来を持っている」とも。

ガルシア先生のクラスの子どもたちは、その両親たち同様に、ガルシア先生が自分たちの可能性を信じてくれていること、そして欠席した時でさえ、わざわざ会いに来て学校に通い続けるように励ましてくれることを知っている。

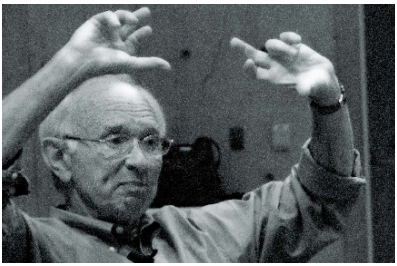
ミシオネス州では、ガルシア先生のような教師たちは、３年生まで進級できないかもしれない“ラモン”や“シルビア”のような生徒にとっての希望の光である。

挑戦的な歓迎

「あなた、アルゼンチンはベトナムではないのよ。ベトナムでは通用したかもしれないけど、あなたが言う“ポジティブ・ディビエンス”とやらはここミシオネスではうまくいかないわよ。私たち教員は何ヶ月も給料は支払われない。そして、中退するような子どもたちの親たち自身が価値のない人間であり、子どもの教育に関心すらないのよ。それにあな

ポジティブディビアンスの調査はコミュニティメンバーが型にはまらない解を探求するのを可能にする。

た、私たちの状況も問題も何も知らないでしょ」と経験の長い女性教師が釘を刺した。他の教師も腕組みをして、けんか腰の目つきで、それに同意するように頷いた。



ジュリースターンがよくしていた“180°フリップ”
写真：デイビット・F・ガッサー

「マダム、たしかにあなたの言っていることは正しい」とジェリー・スターニン（ポジティブ・ディビアンス・イニシアティブの共同設立者）は答えた。「でも、ここにいる皆さんの何人かは児童の85％以上を学校に通わせ続けているというのもまた事実ですよね。たしかに私はこの状況について何も知りませんが、あなた方が抱える問題の解決法がこの教室の中にあると確信しています」[2]

少し間をおいて、年配の教師が「ええ、それは正しいわ」と話し始めた。そして「でも、私たちは親と学校の管理職の双方から子どもたちの中退が多いことについてよく咎められているんです」と付け加えた。

「それはいつもなんですか？」「すべての学校で？」
長い間をおいて、教員のうちの何人かは話をもっと聞きたいかのように身を乗り出し何人かは渋い顔を止め、何人かは笑ったようにも見えた。

「PD は何でも難なく解決する魔法のようなものではありません」とジェリーは謙虚に続けた。「しかし、特別な環境下になくとも子どもたちが就学し続け、より多くの卒業生を出しているミシオネス州の小学校に注目することで、（解決法を）得られるかもしれないのです」

教師たちの腕組みされていた手はほどかれ、ジェリーの提案が支持され始めるのがわかった。

その日のプログラムが終わる時には、場の空気は劇的に変わっていた。中には、次の日もこのディスカッションを続けたいと思っている参加者がいた。「今日もっとも驚いたのは、何人かの先生方に通学できている児童の親を誘ってもよいか聞かれたことです」とジェリーは言った。プログラムが始まった頃には、児童が中退する原因は親にあると責めていたのにである。しかし、今は、親をこのプロセスに巻き込むことが問題の解決につながる近道かもしれないと皆が感じ始めていた。

180°フリップ

ジェリー・スターニンを知る人は、ものの見方をシフトさせる合図、180°フリップ (手をひっくり返すこと) について語るだろう。つまり、問題をフリップ（ひっくり返え）し、

解決法に集中することである。

ワークショップ２日目、22人の親たちが参加した。先生たちからの招待に対して警戒心を抱き、神経質になっている様子が明らかに見てとれた。

PD 的な学校を選んでいく　写真：PDI

「何を期待されているのか私たちには分からない」と一人の親が言った。「私には何か貢献できることがあるとは思えません」ともう一人の親が言った。

ぎりぎりの生活をしている農家たちは、意見を求められることに慣れてはいなかった。けれども、これまでの他の PD アプローチの活用の試みを開始する場面では何度も起こってきたように、このケースでは、一番期待できないと思われた親たちがたくさんのアイデアを出し、大いに貢献した。親たちは教員たちよりも早く 180° フリップを受け入れた。彼らは直感的に感じとり、自分の子どもを学校に通わせ続けるために様々な苦難に打ち勝ってきたことや近所の人たちが同じようにやっていることを語り始めた。これこそ、自己発見のプロセスの始まりである。

PD 再構成、PD 参加者の自己発見

自己発見というのは、PD プログラムにおけるグループの当事者意識にとって重要である。それは、PD を活用することの意義を存分に増大させる。ミシオネス州のアレムとサンペデロという２つの地域では、10の学校からの参加者に自己発見とはどういうことかということが紹介され、その後に PD 現場調査が実施された。

最初に、問題が特定された。親、教師、行政官が参加した場では、「アレム地区の学校は、３年生になるまでに56％の児童しか残っていない」という問題が共有された。

次に、「アレム地区の学校は、到達目標としてそれを75％かそれ以上に引き上げる」という目指すべき状態を共有した。

すべてのひとが実戦可能な戦略のみ残す。残りは“TBU”つまり“本当（TRUE）だが（BUT）使えない（USELESS）”と見なす。

第３ステップとして、このグループでアレムにある PD 的な学校があるかどうか探し出すことに取りかかった。75％以上の児童在籍率を保持している学校を特定するために、小グループに計算機と1999年から2001年の間の１学年から３学年までの在籍児童者数のデータが与えられた[3]。そして、それらを順にランキングし、学校を特定していった。

アレム地区の全63校のデータから、潜在的に PD と考えられる78%～100% の在籍率を保持する８つ学校を特定した。その際、それらがどういう学校であるのかが判明した。８つのうち、２校は一般的な学校とは異なる恵まれた状態にあり、一般的な学校では同様にはできないかもしれないと話し合われた。次の日、６つの学校は PD の学校として絞り込まれた。それらの学校は高い児童在籍率があるものの、地区内の他の学校との違いはあまり見られなかったからだ。

第４ステップでは、教員と親の混合チームがその６つの学校を訪れ、一般的でない取り組みを発見することに着手した。初日、徹底的に教員と行政官へのインタビューを試み、授業中のクラスの様子を隈なく観察した。親たちもまた､PD と思われる学校に通わせる親たちを家庭訪問し、インタビューを行った。グループは、施設や給食、教材の状態や活用の様子なども観察した。

PD 行動を発見するプロセスは、単に何がうまくいっているかを見ることではない。例えば、いくつかの訪問したグループは「PD である学校の教員は、児童に対して甚大なる敬意を払っていた」と報告し、そのような敬意を表現をするような特定の行動や取り組みを見つけ出したわけではなかった。このため、良い成果を生み出す具体的で検証できる実践を特定するのに、その学校をまた訪問することになった。

ジェリーがこの PD に関する重要な認識に関してグループに論理的な挑戦をしたときにはじめて、メンバーたちはさらに掘り下げて PD と思われる学校の実践を発見する気持ち

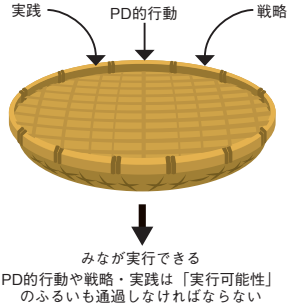


表１：アルゼンチン・ミシオネス州の小学校における従来の実践と PD 的な実践の比較

影響を及ぼす分野・対象	従来のやり方	PD的な実践
学校と親の関係	正規の学校教育を受けていない、あるいはほとんど受けていない親が子どもの教育に関わる機会を与えられることはない。	すべての親が学校に貢献できる。親たちが裁縫や木工などの技術的なワークショップを開いている。また、彼らはフェンスの張り直しなど学校の維持管理、子どもたちのレクリエーションやパレードを中心になって企画する。
教育方法	すべてのクラスで、能力や年齢にかかわらず同じ宿題が課される。	クラスを小グループに分け、宿題はそのグループの能力に応じて課される。
コミュニティの関わりの度合い	学校と地域のリーダーとのコミュニケーションはほとんどない。	学校は司祭のような地域のリーダーを把握しており、問題についてその人たちと協議できている。地域のリーダーは子どもたちが通学を継続させるために積極的に関わっている。
栄養	児童は学校で1回の食事（昼食）が提供される。	学校はお腹を空かせている児童の学習効率が上がらないことを認識している。学校は昼食の代わりに朝食を提供している。

になった。
ジェリーは意味ありげに問いかけた。「すべての学校が愛と敬意をもって児童に接しているだろうから、それは在籍率になんらインパクトを持たない。つまり児童在籍率56％の学校と100％の児童在籍率を誇る学校と同じように児童と扱っていると言うことになりませんか？」
このような PD を発見するプロセスを参考に、グループメンバーは取り組みについて、より詳細な描写ができるようになった。

例えば､PD である学校において、教員は学校を訪ねた親にいつでも心を込めて挨拶をしていた。そのような場合、親たちも担任に対して心地の良い接し方をする。また、教員は親たちに会合への招待状に返信するよう依頼し、その返信がなければ、直接連絡するようにしていた。

教師と親が児童と互いに影響し合うという点、授業と評価の点において、あるいは地域がどう関わるか、児童の栄養面のサポートという点において､PD 発見のプロセスでは一般的でない具体的な実践が明らかになっていった。（表１参照）

高い児童在籍率を誇り、実践計画を持つ PD 学校を訪問し特定された一般的でない PD 行動は、親、教師、行政官によって実行された。PD 行動が実際に学校現場で実践され始める前の最後のワークショップは、少々違ったトーンで幕を閉じた。

「私たちは異端者になった！」とミシオネス州の教育庁長は言った。その後、６つの学校は、特定された PD 行動とすぐに実践可能な解決策を基盤に構想を練った。そして、そのいくつかの PD 行動はすぐに実践されたのだった。

週が明けてすぐ、教員と親は欠席がちな児童

ポジティブ・ディビアンスは即座に実践できる結果を生む実践ベースのアプローチである。

ミシオネス州内の小学校でしっかり学校に通う児童たち
写真：PDI

を割り出し、その児童の親の家を訪問し、欠席していることについて話し合いをもった。

家庭では、親たちが子どもたちの教育の質の改善を図るために挙げた約束事が書かれた「公約ポスター」を貼り出すようにした。550人以上の生徒を持つ学校にたくさんこのポスターが貼られている様子を想像してみてください！

小さなさざ波、大きな変化

すぐに取りかかれる小さな実践、つまりロウソクの火を消し、“Happy Birthday”を歌い、ケーキを切ることは、大きな違いを生み出した。それはミシオネス州において、ラモン、パオラ、ビセンテ、シルビアや他の児童たちが学校へ通い続け、毎年誕生日祝いのメッセージを教室の壁に貼り出せることを確実にしていったのだった。

ある親が、ミシオネス州の児童の在籍率が高いことについて適切に言い表した。「学のない私でさえ、PD の実践は家で取り組めるのです。それは隣近所にも伝えることができるし、そのことで彼らは子どもたちにより良いサポートをしてあげることができる。私は、自分の子どもをより良い方向へ導くことができる教師に近い存在なのだと勇気づけられています」

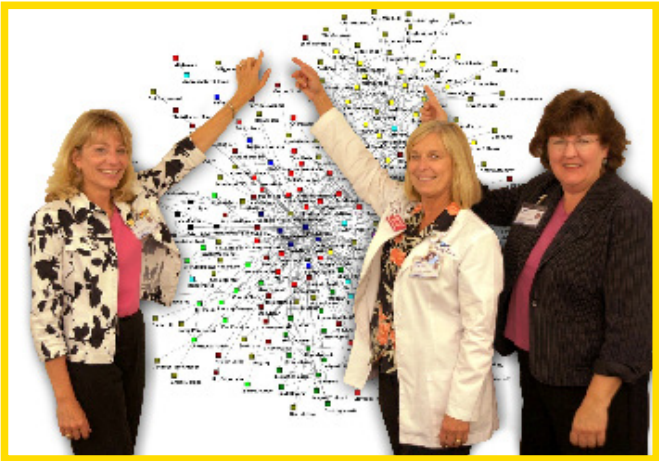
---

[1]Dabas, E. and Yanco D. (2003). Enfoque de desviación positiva en el ámbito educativo: Misiones, Argentina, 2002-2003. Unpublished report prepared for the World Bank.
[2]Sternin, J. (2003). Positive Deviance (PD) Student Retention and Educational Enhancement Program. Unpublished report. Buenos Aires, Argentina: World Bank.
[3] 学校は名前ではなく数字で分類され、従ってパフォーマンスと関するイメージではなくデータのみに基づいて選定された。

人間関係のあり方を変えることで救われる命

米国病院でのMRSA感染コントロールと予防のためのポジティブ・ディビアンスの活用[1]

著：アービンド・シンハル，プルシア・ブッセル，キース・マッキャンドル
翻訳：長尾素子



もし、ジャンボジェットのパイロットたちが忙しくてフライト前のいくつかのチェックを怠り、10回に４回は急いで離陸することによって毎日一機が墜落し、275名もの死者が出るとしたら？

このようなぞっとする出来事が米国の病院で起きている。全米で平均すると、院内感染で命を落とす患者は1日に275人にも上る。これは、医師、看護師、理学療法士、救急車の運転手、ヘルスケアなどの医療従事者が手の消毒を怠ったり、急いでいて、医療用ガウンを着なかったり手袋をはめないことが理由で起きる。

院内感染の主なバクテリアは、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌 (MRSA) で、最も広く使用されている抗生物質に耐性のある、恐ろしい病原菌である。あらゆる物質の表面で6週間生き続け、接触時に簡単に感染する。MRSAによる院内感染は過去30年間で32倍に増えた。

このような警戒するべき現状のなか、少数であるが、院内感染を急激に減少させた病院が米国にある。モンタナ州ビリングス市にある総合病院ビリングスクリニックでは、院内感染が過去2年半で84%も減少した。このクリニックではどんなことが行われたのだろうか？

賞罰をもって衛生管理をし、うまくいかない場合は、どうしてうまくいかないのかを明らかにしようとする従来のやり方ではなく、ビ

全米の病院では毎日平均して約275人の患者が院内感染で死亡している。その多くが手洗い、ガウンの着用、手袋の使用のプロトコルが厳守されていないことが原因である。院内感染は100%防ぐことができる。

MRSA感染予防に対するビリングスクリニックのアプローチはすでにうまくいっていることを特定し、その実践を広げることに焦点を当てる。

リングスクリニックでは、院内感染を防ぐのに、どうしてうまくいっているのかに焦点を当てる。それは、事務職員、医師、看護師、清掃員、理学療法士、技師、聖職者、ソーシャルワーカーのなかで、院内感染を防ぐ簡単だけれども一般的ではない行動をとる個人が存在するはずだという考えに基づいている。たとえば、以下のような例を挙げることができる。

半袖を着用するフェアファックス医師
写真：プレクサス研究所

- ある医師は、意識的にMRSAに感染している患者の回診を最後に行い、このとても簡単な結果により感染の広がりを大いに防いでいる。
- ある集中治療室の看護師は、自分が担当のときにはベッドの柵を何度も消毒し、感染の広がりを防いでいる。
- ある看護師は、感染者と自分自身の間に衛生シーツをはさむことで微生物の移動を防いでいる。
- ある医師は、ネクタイ、白衣、長袖シャツなどあらゆるMRSA感染の媒体となり得るものの着用をやめた。同僚も同じようにしている。

ジェリー・スターニン
写真：PDI

以上の例は、ビリングスクリニックではポジティブ・ディビアント（逸脱した成功者）である。彼（女）らは、行動が普通ではないという意味で「ディビアント（逸脱者）」であるが、院内感染を予防する望ましい行いをする模範者という意味で「ポジティブ（成功者）」でもある。望ましい予防方法を見つける人が増えるにつれ、その新しい実践も広がり始めている。

難しい行動の問題を探る

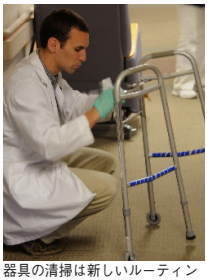
2004年の夏、ビリングスクリニックの代表者であるニック・ウォルター医師は、ニューハンプシャー州ダーラム市で行われたワークショップに参加した。そのワークショップでは、タフツ大学ポジティブ・ディビアンス・イニシアティブの設立者の一人であるジェリー・スターニン氏がポジティブ・ディビアンスについて15分間プレゼンテーションした。ポジティブ・ディビアンス（PD）・アプローチは、社会、行動に関わる困難な問題に取り組むのに有効であると、スターニン氏は強調した。

基本的な手の消毒手順に従うことが、米国の

ポジティブ・ディビアンスのアプローチは「通常は考えない容疑者」つまり見逃してしまう人たちの知恵に価値を置く。

手洗いとガウンの着用そして手袋着用の正しいやり方をしないということは行動の問題であるが、技術的なものとして扱われていた。

病院では難しいと、ウォルター医師は自分自身の経験も含め、感じていた。米国の病院では、患者に接する際の消毒手順を遵守しているのは29%から48%と推計されている。ということは、医療従事者と患者の接触が、感染リスクとなっている可能性は高い。患者が、病院が恐ろしい病原菌の感染場所ではなく、安全な環境であると期待するのは当然であり、この数字は極めて問題である。


器具の清掃は新しいルーティン
写真：プレクサス研究所

患者を診る前に手を洗い、診察中にポケベルが鳴って操作したのち再度洗うのは面倒だと、医師であるウォルター氏でさえ感じていた。自分の手が清潔だと思っている人は、感染を広げるなどとは全く思わずに、やりかけていた仕事をつい再開してしまう。

院内感染は100%予防可能である。手の消毒、手袋をはめる、医療用ガウンを着るといった手順をきちんと守れば、感染を減らせる。しかしながら、周知された知識、正しい行動、感染予防の手順を守ろうと思っているにも関わらず、感染率は上がり続けてきた。意外にも、医師、特に外科医たちの間で最も問題が多かった。手の消毒、手袋をはめる、医療用ガウンを着るといった手順を守れないのは、人の行動の問題であって、道具に関連するような技術的なものではない。
PD アプローチがこの行動の問題を解決できるかもしれない。また、複雑系科学原理に基づき、小さな変化が大きな変化を生むかもしれないという気づきが、挑戦に結び付いたのだ。ウォルター医師とビリングスクリニック内の感染予防センター長であるナンシー・イバーセン氏は、プレクサス研究所率いる院内感染予防パートナーシッププロジェクトの6つのベータ病院のひとつとしてプロジェクトに参加する権利を勝ち取った。プレクスサス研究所は、小さな NPO 団体であり、複雑系科学の原理を使って地域や組織の人々の健康促進に取り組んでいる。2006年には、６ベータ病院は院内感染が行動および社会の問題であるとして、PD を使ってこの問題に取り組むこととなった。PD アプローチは複雑系科学と親和性が高い。モニーク・スターニン氏は、ポジティブ・ディビアンス・イニシアティブの設立者の一人、キース・マクキャンドレス氏とともに、ビリングスクリニックの PD コーチとして、プレクサス研究所に就任した。数か月後、ジョエル・エベレット氏がそのコーチングチームに加わった。２年半後に、院内感染は84%も減少し、また、他の抗生物質が効かない細菌性の院内感染も同様に減少した。

ある行動を起こす

ビリングスクリニックの院内感染予防活動は、ゆっくりと、そして混乱しながら始まった。疑問の声、不安や不確かなことも多々あり、そのたびに交渉、議論、対話が繰り返された。始めは失敗もあり、懸念もあったが、一方で小さな成功と喜びもあった。さっそく変化が見られたが、それは小さくても影響力があった。

イバーセン氏と彼女のチームは、ウォルター医師の協力もあり、ビリングスクリニックでのPDを使った問題解決の取り組みに努力した。彼女は最も大きなチャレンジだったことを思い出し、次のように語った。「人々が自分自身で学び、解決法を発見し、それを安心して実践することができるような経験ができる場をどのようにつくるのかが重要であった」と。PDコーチのマクキャンドレス氏は、そのような場として「ゲリラ劇」、つまり即興劇（普通は「アドリブ」と呼ばれる）を提案した。

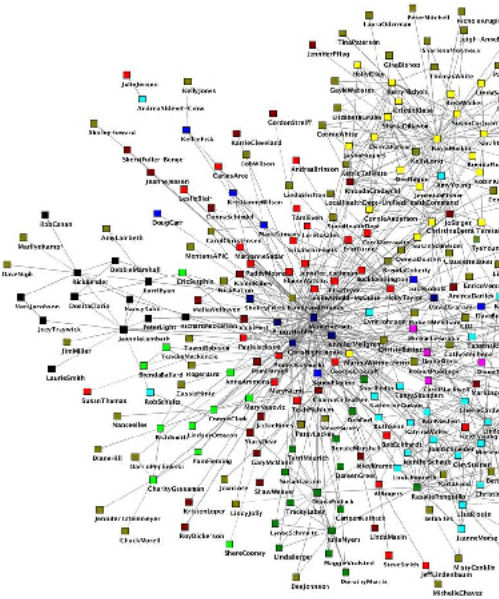
MRSAを顕在化させるチョコプリン
写真：プレクサス研究所

「病院で劇だって？」と疑い深い人たちは、その考えを嘲笑った。

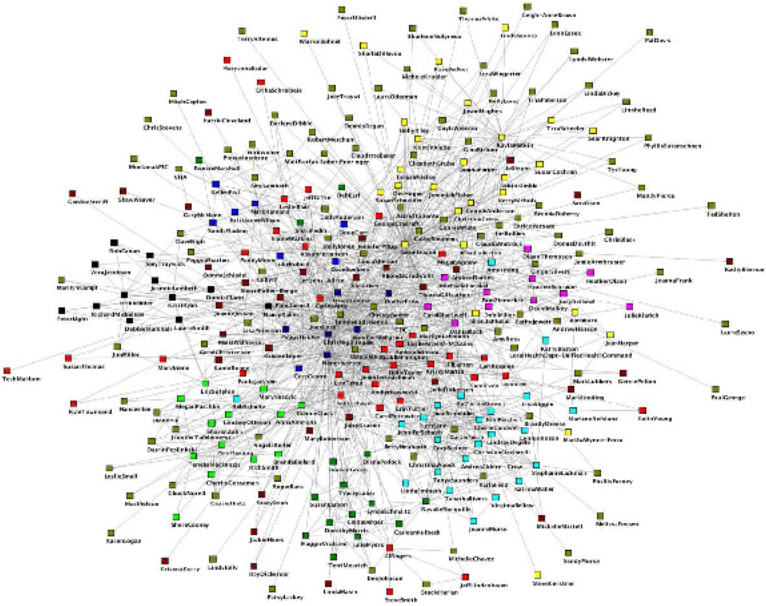
しかし、イバーセン氏と彼女のチームは、あきらめなかった。配役を考え、俳優を募り、2007年には50ほどの即興劇が演じられた。院内感染予防に取り組む500名ものスタッフを巻き込んでである。彼（女）らは、ビリングスクリニックの最前線で働くスタッフだ。初回の成功を受けて、2008年には即興劇祭りを開催した。シナリオでは、感染している患者を院内でどのように移動させるか、必ずしも動くことができず部屋でじっとしているわけではないリハビリ患者とどう接するか、権力者に対していかに率直に話すか、予防具の身につけ方と安全な廃棄の仕方など、実践的な事柄を扱った。

あるセッションでは、看護師とほかのスタッフの間で、院内感染している患者の食事用トレーを部屋から下げる方法についての話し合いが行われた。使い捨てのトレーにすることを提案する者がいれば、それに対して「紙皿の上に冷めた料理を出せば、患者はさみしい思いをするではないか」と反論する者もいた。様々なアイディアが次々と出されたが、最終的には簡単にできることを思いついたのだ。看護師がトレーの下と端を抗菌布巾でふいて病室の外にいるスタッフに渡すというものである。また別の即興劇のセッションでは、次のような場面が演じられた。けがで化膿し茶色い汁が染み出している患者の足を診察した外科医が、そのあとで患者の家族と握手をし、看護師の背中を軽くたたき、何かをさわったあと、診察に戻るというシーンである。あっという間に、患者の体と寝具、手、医者の服、看護師、患者の家族に茶色のしみがついた。茶色の液体はチョコレートプリンなのだが、黄色ブドウ球菌の代わりに使われ、実際には目に

ポジティブディビアンスと即興劇はきわめて親和性が高い。つまり、これまでのやりかたを別のやり方で実行してみるということなのだ。



PD プロジェクトが始まる前のベースラインの人々のネットワーク



PD プロジェクト開始 18 ヶ月後の人々のネットワーク

ビリングスクリニックのネットワークマップは「通常は考えない容疑者」を特定するのに役立ち、そのような人々の影響も見えてきた。

見えない細菌がどのように広がっていくかが可視化された。
即興劇に参加したさまざまな部署の最前線で働くスタッフは、即興劇は面白く新鮮な学びの場であると述べた。そのような学びの場は、よくある講義やミーティングとは異なる。劇のシーンはなるほどと思わせる気づきの連続であった。

カルロス・アーシー氏は、ビリングスクリニック内にあるリーダーシップ推進部長であるが、即興劇について次のように述べる。

即興劇とポジティブデビアンスは相性がいい。即興劇は「これまでのやり方を別の考え方で行動してみる」きっかけになる。即興劇によって、言えなかったことや見えなかったことが伝えられる。舞台は、それを行うための実験スペースであり、しかも人間関係を気まずくすることもない。

人間関係のあり方を変えることで感染を防ぐ

「ビリングスクリニックで最近院内感染が減少している現状を、どのように説明しますか」とウォルター氏に尋ねた。彼の答えはこうだ。「ビリングスクリニックでは、人間関係のあり方を変えることで院内感染を防いでいる」と。本当に人間関係を変えることで患者の命が救えるのか？300人ものビリングスのスタッフの関係性がどのように変化したか調査が実施され、2006年と2008年人々のネットワークの様子を示す図が並べられ大きなポスターとして掲示してある。（左ページ参照）。より多くの人々が院内感染予防について話し、部署内で対策をし、部署を越えて協力がなされた。実際、ビリングスクリニックでは、人間関係のあり方を変えることで命が救われているのだ。

イバーセン氏と調査チームがその図の関係性を調べていくうちに、他者と密接な関係性を築いている「らしくない容疑者」というような少数派の存在に気付いた。その人たちは、貴重な人材であるが、以前は目立ったリーダーとしては認識されていなかった人たちである。

たとえば、そのうちの一人に、サラ・レランド氏という若手のがん専門看護師がいる。彼女は、「分かりがよく、相談しやすい看護師」として認識されていることが明らかになった。クリニックのスタッフは、誰をサポートし、院内感染予防に関わらせ、影響を与えてもらえるようにするのか、について認識するようになった。

PDはデータを使う

ビリングスクリニックでのPDの進め方は、データ収集、分析、そして行動に移すといった一連のプロセスに沿うものであった。2006年の秋に、院内感染予防が始まり、院内感染罹患率の指標が設けられた。真っ先にPDに取り組んだ部署は、積極的に取り組んだ。すべての患者から入退院、移動する際に、綿棒により鼻腔の粘膜を採取し感染を調査した。手洗いとほかの感染予防の行動の遵守の状況を追跡し、記録した。そして、供給物資、購入物資、使用物資が書類に記録された。
PDのプロセスに参加した部署は、感染率を

自分たちがしていることでデータが変化するとき、それは個人や集団にとって大きな動機となる。

色つきのグラフで示し、感染率の減少を表にし、すべての人がデータを見ることができるようにした。手洗いの様子が観察され、データが集められた。各部署のスタッフは、自分たちの行動が記録されたグラフを受け取った。それは基本的に、調査結果のデータを見ながら自分たちルールを具体化し、奨励するためであった。

定期的に集められた院内感染のデータを基に、フィードバックを行い、さらに行動に移すという繰り返しによって、スタッフはより積極的に取り組むようになった。イバーセン氏は次のように述べる。「データを前にして、スタッフは自分たちの行動がもたらす変化を理解した」と。

文化を変える

ビリングスクリニックでは、PD アプローチを採用したことで、ゆっくりではあるが、組織内で明らかな文化的変化をもたらしていると感じている人が少なくない。

ベテラン医師のマーク・ルマンズ氏は、経験を次のように語った。「数か月前に、隔離室というサインがあるのに気付かずに感染病室に入ってしまった。しかも、医療用ガウンも手袋も身に着けずに。部屋を出た後で、失態に気づいた。看護師に謝罪し、サインを見落としたことを告げた」

イバーセン氏は続けて言った。「ルマンズ医師と看護師の対話は、隔離室というサインの示し方を考えるきっかけとなった。今では、決して見落とすことのない場所に掲げられている」

1, 2年前には、ベテラン医師がそのように看護師に謝罪することもなかっただろうし、そこから問題を解決するような会話も生まれなかっただろう。

これは文化的な変化以外の何ものでもないでしょう？

PD を介在させることで対話の質を変化させるという方法は素晴らしい。可能性のあるすべての PD 変化のうち、対話は記録に残すのが最も難しい。なぜならば、対話はコミュニティの構造の中に目に見えない形で組み込まれているからだ。変化があまりにもわずかで、基準が変わっていくことに気づくのはかなり時間が経過してからのことだろう。

モンタナ州のビリングスクリニックのケースは、最前線で働くスタッフがすでに持っている知恵を共有し、行動に移すことで患者の命が救われる可能性を示している。

---

[1] さらに詳しい情報は以下を参照。 (1) Arvind Singhal and Prucia Buscell (2009). From Invisible to Visible: Learning to See and Stop MRSA at Billings Clinic, Billings, Montana. Plexus Institute.

ひまわりは太陽に向かう

ウガンダにおける児童保護のためのPD[1]

著：アービンド・シンハル，ルシア・デュラ
翻訳：柳原　透

PDは極めて困難で非常に複雑な社会問題に対処する上で独自の効果を発揮するアプローチである。歓迎されない拉致被害者であるセシリアのような少女たちをコミュニティに復帰させることより複雑なことがあるだろうか？

「LRA（神の抵抗軍）司令官に与えられているとき、彼の妻であることを強制される。彼のすべての欲求を満たすように世話することが期待されている。すべての欲求よ！私は数日前に返されたけれど、それでも恐ろしい夢に悩まされ続けています。子どもたちが泣くのが聞こえる。私たちは攻撃されている、戦っている、食べ物や水なしで暑い砂漠を何日も歩いている。」

「私は戻って来られて幸せだけど、学校に戻る望みは持っていません。私は自分の将来がどうなるのかわかりません。」

17歳のセシリアは、北ウガンダのグル地区の自宅から誘拐され、５年間監禁された。1986年から北部ウガンダを襲った残忍な内戦を乗り切った幸運な生存者の一人である。20年以上もの間、神の抵抗軍（LRA）は、地元アチョリの人々の名の下に、十戒に基づく神政国家の樹立を唱えて、ウガンダ政府に対してゲリラ戦に従事してきた。紛争は何万もの無実の人々の命を奪い、百万以上の人々を避難させ、セシリアのような５万人以上の子どもの拉致と奴隷化をもたらした。LRA は広範な人権侵害を非難されており、その非人道的な犯罪行為には、殺人、誘拐、身体切断、女性と子どもの性的奴隷化、兵役強制などが含まれる。

「彼ら（LRA）は斧を取ると、頭に振り下ろす。彼らは弾丸を無駄にしない」とセシリアは語った。

セシリアのような拉致被害者が帰郷すると、多くの場合、彼らのコミュニティのメンバーによってけがれた者として扱われる。誘拐された子どもたちは、反乱軍側につくことを強制され、同族者を殺害したり略奪したりした。体は傷つき心にトラウマを受けた上に、誘拐

若い母親の社会復帰のためのPDプロジェクトが試行されたウガンダのPader地区の国内避難民（IDP）キャンプ
写真：ルシア・デュラ、アービンド・シンハル

された少女の中には、敵の子どもを身ごもった者もいる。
敵の子どもを身ごもった母親であるセシリアは語る「私の一番上の子の名はエルマアリモ、『難しい瞬間』という意味です。私たった13歳だったので、そのように名づけたのです」
歓迎されず、教育を受けたこともなく技能を持たない、セシリアのような多くの女の子は、食料、衣料品、あるいは寝る場所とさえ引き換えに、セックスを提供するしかない。どうしたら、これらの寄る辺ない若い女の子たちが自らの人生を変えることができるのだろうか？

自分の子供を抱くエレーヌ
写真：ルシア・デュラ、アービンド・シンハル

LRA 後の人生

2007年 3 月に Save the Children は、PD アプローチを用いて、北部ウガンダのパーダー地区のセシリアのような少女たちのエンパワーメントと社会復帰を支援するためのパイロット・プロジェクトを立ち上げた。PD プロジェクトは、500 人の生存した若い母親と女の子に加え、コミュニティベースの指導、農業や資金面のアドバイス、および心理面全般の支援を提供する 50 人の大人のメンターを対象とした。このPD プロジェクトに参加した若い母親の一人で、グループ中の PD がエレーヌであり、彼女の日々の行動は生き延びることを超えて発展をもたらすものであった。

Anyira, lagam me pekowa, tye botwa…
少女たちよ、私たちの問題に対する答えは、私たちの中にある…

ヒマワリが太陽に向かうように、エレーヌの庭は、彼女の夢や志によって育まれて成長している。
同じ土の上で、同量の水と日光のもとで、少数のヒマワリは、根を強く生やし、高く伸びる。中にはエレーヌよりも背が高いものもある。

エレーヌのヒマワリ
写真：ルシア・デュラ、アービンド・シンハル

PD調査は、とりたてて資源に恵まれていないのに、より効果的に問題に対処する地域内の人々を特定するのに役立つ。

「私はすべての種を、ヒマワリ、キュウリ、その他のもの、一つのかごの中で混ぜ合わせ畑にまく。これらの植物は一緒によく育つんです。私はこの混作のやり方を父から学びました。父は優れた農夫でした」

PD はコミュニティの問題に対する解決策は現地の既存の知恵の中にある、という信念に根ざしている。

Bed lanyut maber
模範であれ

エレーヌが行っているPD行動はどのようなものか。

家で使ったり売ったりするために薪を余分に入手する
友達と協力して農作業、育児、作物などの販売を行うことで能率を上げる
水を缶に汲んで売る
作物や商売についての叔母、両親、コミュニティ長老からのアドバイスに耳を傾ける
人付き合いにおいて丁寧である
毎日 1-2 時間多く庭仕事をする
貯金をして生産活動に再投資する
各季節に複数の作物を育てて売る
学校に通う

PD 行動は誰にでもできるものでなければならない。多くは、単純で、すぐに実施することができるものである。

PD における現地および外部の専門家の役割は、聞き手やファシリテーターである。専門家には、コミュニティ全体を対象とする PD 調査を促進して、少数の人が特定の問題の解決や予防を実現するために用いている方策を、コミュニティの人々が自分たちで発見できるようにすることが期待される。

PD 調査は、とりたてて資源に恵まれていないのに、より効果的に問題に対処する地域内の人々を特定するのに役立つ。普通ではなく効果が高い PD 行動が可視化され、やり方が分かることで、他の人々が真似をすることができるようにする。

エレーヌが行っている PD 行動はどのようなものか。

深い根を張り高く伸びるヒマワリのように、エレーヌは、拉致、若年妊娠、シングルマザーとして子どもを育てるといった苦難にもかかわらず、自らの行動を通じて自らの評価を高め、帰還したコミュニティの一員として受け入れられている。

PD 行動を通じて、エレーヌは、同じような立場の少女たちに、不利な条件を克服することは可能であることを示すお手本になっている。エレーヌにできることなら、他の少女たちもできる。エレーヌが実際にしていることなので、他の少女たちも助けなしに始めることができる。

Tii pi kwoni
あなたの人生のために働きなさい

混作をすることで、エレーヌの収穫は豊かになる。彼女はコミュニティの他の少女たちに比べてとりたてて資源に恵まれているわけではない。父から授かった知恵を実践することによって収穫を増やしているだけである。その混作のやり方は、地元の豊かな知恵の一つである。

abayo（叔母であり助言者）であるアナから指導を受けて、エレーヌは収穫の時には人を雇い、次にはさらに多くの種をまくことができるようになる。*abayo* であることを、アナはとても誇りに思っている。子どもたちの能力

作物の中には収穫後に販売されるものもある。G-ナッツ（ピーナッツ）のような他のものは、将来の使用または販売のための "貯蓄" として取っておかれる
写真：ルシア・デュラ、アービンド・シンハル

エレーヌとメンターであるアナ
写真：ルシア・デュラ、アービンド・シンハル

を高めると同時に、アナは自身の能力も高めている。

帰還した拉致被害者をコミュニティに再統合することを目的として Save the Children が北部ウガンダで実施した PD プログラムでは、現地 *Acholi* の文化伝統に即して、叔母であり助言者である *abayo* たちが、信頼される保護者として、そして助言者として、少女たちを助けている。彼女たちは、エレーヌの混作のやり方のような PD 行動を広く知らせ、多くの他の少女たちも真似できるようにしている。

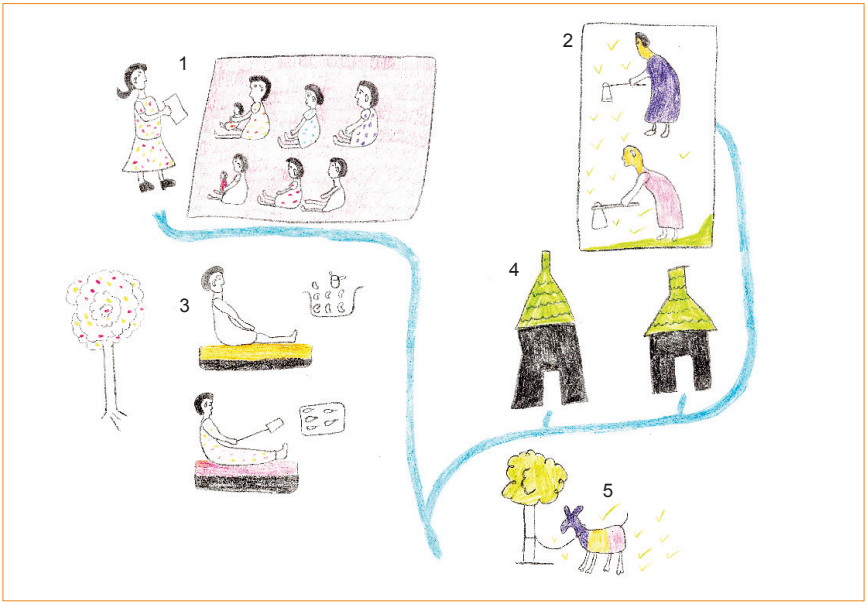
PD プロセスを通じて、コミュニティの他のメンバーは、エレーヌやその他の PD 的な少女たちがしていることを真似するようになる。もう少し長く一生懸命に、そして力を合わせて働くこと、*abayo* の指導を仰ぐこと、混作をして虫害を防ぎ収穫を増やすこと、などである。PD 行動をするようになったプログラム参加者たちは、自分たちのことを“PD ガール”と呼ぶ。

北部ウガンダの“PD ガール”たちが一緒に描いたスケッチ（右ページ参照）には、彼女たちが農作業についての知識を共有し、力を合わせて働き、効率的に時間を使って利益を上げることができるということが示されている。スケッチを指さしながら一人の“PD ガール”が説明した。

「Save the Children による能力強化訓練（#1）の後、私たちは作物の選択についての情報を共有するようになった。畑で一緒に働き（#2）、私たちの農産物を集め、一緒に市場で売った（#3）。私たちは家を建て（#4）、ヤギを共同で買い（#5）、繁殖したら売上を分け合う。」

“PD ガール”の一人の父親であるエドモンドは強調して言う。「“PD ガール”たちは、時間を見つけて畑仕事をする。学校がないときには、午前中ずっと働く。他のほとんどの女

PD 行動をするようになった北部ウガンダのプログラム参加者たちは、自分たちを "PD ガール " と呼ぶ。



何人かの“PD ガール”が描いた 5 つの PD 行動を説明するスケッチ

は、家事や休憩のために家に戻る。“PD ガール”の多くは、午後や夕方にも畑仕事をする」

“PD ガール”の一人であるジェーンが口をはさんだ。「自分の畑での仕事を終えた後、私は友人の庭で働いたり、少しお金を稼ぐためにコミュニティの人の畑で働いたりします」

もう一人の“PD ガール”であるマリーは「マンゴー畑で仕事をするとき、私は自分たちで食べる分または売るためにいくつかのマンゴーを持って帰ります」

助言者であるグレースが言葉を加えた。「“PD ガール”たちの中には、薪を採りに行くとき

PD 行動は、単純ですぐにでき続けることができるので、コミュニティの人々がまねしやすく、広範にわたる変化をもたらす。

"PD ガール " たちは自らの労働の成果を収穫する
写真：ルシア・デュラ、アービンド・シンハル

多めに持ち帰る少女がいます。料理に使ったり、次の日に売ったり使ったりします。“PD ガール” の一人は、20 リットル缶に地下水を汲み、自転車の後ろにしばりつけ、工事現場で売ってお金を稼いでいます」

ウガンダで PD の試行プロジェクトに参加した少女たちに関する評価として以下の成果が示された。

93％の少女たちが、作物を育て、コミュニティへ再び融合していくために農作業に従事し、生きる手段としてセックスすることを少なくとも減らしていった。

54％の少女が、一年後に 50,000 シリング以上の貯金をしたと報告した。

96％の少女が、討論、歌、芝居などのグループ活動に参加して自尊心を取り戻したと報告した。

しっかりと根を張ったひまわりたちが、太陽に向かって高く伸びている。

---

[1] ウガンダにおける「PD と児童保護プロジェクト」の記録の作成に当たり、以下の方々や機関のご支援をいただいた。記して謝意を表する。Oak Foundation の Anastasia Anthopoulos of; Save the Children USA の Lisa Laumann, Dan Rono, and Samoa Pereira; Save the Children, Uganda の Peter Nkhonjera, Tom Cole, Bonita Birungi, Luc Vanhoorickxof; バデール地方における PD 実施チームの構成員である RobertOmara, Paska Aber, Simon Lukone, Jimmy, Beatrice, Raymond, Jennifer, Betty, Nathan,「LRA 後の人生：北部ウガンダでの若年母親と拉致被害少女のための PD 試行 (The Life after the LRA: Piloting Positive Deviance with Child Mothers and Vulnerable Girl Survivors in Northern Uganda)」プログラム はジュネーヴの Oak Foundation からの資金により、Save the Children により実施された。詳細については、Arvind Singhal and Lucia Dura (2009). *Protecting children from exploitation and trafficking: Using the Positive Deviance approach in Uganda and Indonesia.* Save the Children, Washington D.C. を参照されたい。

[2] セシリアは、LRA に拉致され監禁下で数年を過ごした少女の仮名です。帰還した拉致被害者が語る言葉は、国連人道問題調整事務局のプロジェクトである IRIN（www.irinnews.org）で参照することができる。

熊本大学
政策創造
研究教育
センター

www.positivedeviance.org

POSITIVE
DEVIANCE
INITIATIVE

SOCIAL JUSTICE INITIATIVE